http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.388　18/06/11

万引き家族

８日からエアコンが入ったのはうれしいが、今まで教室のドアを開け放って授業をしていたから、先生方の大きな声（英語…）や君たちの笑い声などが聞こえて、それはそれで楽しかったのだが、今は教室はもちろんのこと、国語科職員室のドアも閉めて切っているので、ちょっと寂しい気もする。

さて、カンヌ映画祭で、是枝裕和監督の「万引き家族」がパルムドール（最高賞）を獲得したことを知っている人も多いだろう。早く見てみたいのだが、作家の角田光代さんが映画評を書いている。現代文でやった「虚ろなまなざし」とも重なる部分があるので、引用してみよう。

＊

正しさの陶酔、揺さぶる「万引き家族」

この映画を見ていると、近年新聞で見た見出しや記事が次々と浮かんでくる。生活扶助費の削減計画、子どもの貧困、児童虐待、年金不正受給。子どもに万引きをさせていた親が逮捕されるというニュースも、現実にあった。それらのニュースを見聞きしたときにわき上がる印象と、この映画が描き出すものは、しかし、ほとんど対極と思えるほど異なる。

（中略）

この家族が、言葉に拠らず共有している暗号を、当然ながら家族以外の他者は理解できない。理解できないものを、世のなかの人はいちばんこわがる。理解するために、彼らを犯罪者というカテゴリーに押しこめる。理解を超えたおそろしい事件が起きたとき、「心の闇」というような名付けを、すぐに見繕うように。そうして名付け、カテゴライズすることによって、世のなかの人々は安心するのだし、自分とは関係のないことだと信じられる。もちろん私もそうした世のなかの一員である。幼児を虐待する親は極悪人だと思っているし、万引き常習犯は病んでいるのだろうと思っている。彼らが自分と――いや、自分が彼らと同じ人間だと思うことはこわい。だから線引きをせずにはいられない。

実際に起きた事件の見出しを見たときと、この映画の印象が対極くらいに異なるのは、だからだ、とようやく気づく。この映画は、そんな線引きをさせないからだ。私たちの生きているのと同じ世界に彼らがいる――彼らが生きているその同じ世界に私たちがいる、と思わせるからだ。そのとき、見出しや記事にあふれている言葉が、他人ごとではなく私の現実に生々しくなだれこんでくる。

よく理解できないこと、理解したくないことに線引きをしカテゴライズするということは、ときに、ものごとを一面化させる。その一面の裏に、側面に、奥に何があるのか、考えることを放棄させる。善だけでできている善人はおらず、悪だけを抱えた悪人もいないということを、忘れさせる。善い人が起こした「理解できない」事件があれば、私たちは「ほら、悪いやつだった」と糾弾できる。なんにも考えず、ただ、ただしい側にいるという錯覚に陶酔することができる。そんな、シンプルで清潔な社会への強烈な違和感がこの映画から立ち上ってくる。

作品のなかで、父親が息子に読み聞かせるのは『スイミー』という絵本だ。ちいさな魚たちが集まって大きな魚を模し、おなかをすかせた大きな魚を追い出すくだりが読まれる。大きな魚とは何か？　ちいさな魚とは？　私はどちらにいるのだろう？　どちらにいるつもりになっているのだろう？　そこから何を本当に見ているのだろう？　映画の世界が、終わった瞬間に私の現実にそのまま流れこんできたような、そんな感想を持った。

（朝日DIGITAL 20180608）